

ひと続きのかたち

個々を「一つ」として捉えたい、その思いで個々が繋がりをあえる接点を表出させるようなことを様々な手段で取り組んでいます。

それぞれが主張し、相入れないものをどのようにすれば繋げることができるのか、個性を越えて現れるものにとっても関心を持っています。

その中で一つ視点を与えてくれるのは雪の存在です。

故郷である北海道小樽市は雪が降る地方ですが、冬になると個々に主張する看板、建物、人も全てが個性を残しながらも、共にここにいるという安堵感と共に一体感を感じさせてくれました。

そのような雪の有り様に見出せるような、「なだらかなひと続きの調和」は私の美意識の原点にあるように思います。個性がありながらも一体であり、なだらかな丘陵のように繋がって自由に行き来ができるような状態です。

本展示会では、

近年特に取り組んでいる、包みを包むフェルト作品と、石と石粉粘土を用いた立体作品の2シリーズで構成しています。

前者は、他者との差別化に存在意義がある包みの存在に対して、等しくフェルトで包み、ぼかすことで生まれる調和を表現しています。

後者は、それぞれの関係性ゆえに作られる形に焦点を当てた立体作品シリーズです。

ものを通して表現したそれぞれの作品を通して、「ひと続きのかたち」に思い巡らせていただけたら幸いです。

澁木 智宏